



秋山庄太郎写真芸術館ニュースレター

「花信—はなだより」

2007年9月 禁無断転載

Vol.2

「薔薇」展

会期：2007年9月12日(水)⇒12月24日(月)

休館日：毎週火曜日

開館時間：午前10時30分～午後6時30分

(土曜日は午後8時)

入館受付は、閉館時間の30分前まで

入館料：一般 700円

学生(高校生以上) 500円

小・中学生 300円

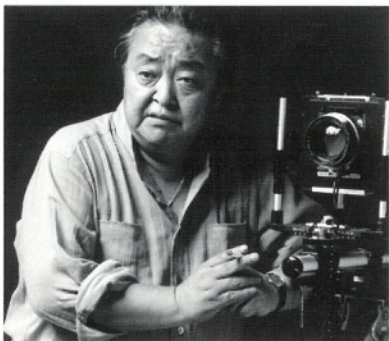
高齢者(65歳以上) 500円

※来館者の方は、カフェのお飲み物が

割引になります。



(1982年、スタジオ)



秋山庄太郎 shotaro akiyama

略歴

- 1920年 6月8日、東京・神田に生まれる
- 1933年 中学入学後、小型カメラを買ってもらい、以後、写真に夢中になる
- 1943年 早稲田大学商学部卒業。写真集『翳』を自費出版。中国大陸に出征。
- 1946年 東京・銀座に秋山写真工房を開設
- 1947年 近代映画社写真部に入社
- 1950年 日本写真家協会創立会員となる
- 1951年 フリーランスとして独立し活躍
- 1953年 二科会写真部創立会員となる
- 1955年 東京・麻布今井町にスタジオ開設
- 1956年 写真家集団「ギネ・グループ」結成
- 1958年 日本広告写真家協会創立会員となる
- 1960年 パリへ4ヶ月間の外遊を行なう
- 1964年 東京・西麻布にスタジオを移転
- 1965年 この頃から本格的に花を撮り始める
- 1971年 日本広告写真家協会会長に就任
- 1974年 講談社出版文化賞受賞
- 1980年 「花の会」結成。日本写真芸術専門学校校長に就任
- 1986年 紫綬褒章受章
- 1990年 日本写真家協会名誉会員となる
- 1993年 勲四等旭日小綬章受章
- 1994年 全日本写真連盟副会長に就任
- 1997年 日本写真協会副会長に就任
- 1999年 町田市フォトサロン「秋山庄太郎美術館」が開館
- 2003年 1月16日、東京・銀座の写真賞審査会場で倒れ、急逝。享年82歳。

幸運な「宝もの」

秋山庄太郎写真芸術館
学芸部長(学芸員)

上野 正人

スタジオや自宅に残された膨大な「資料」

開館記念展示「パリの4ヵ月そして、その後」の感想の多くに、「意外だった」「驚いた」ということがありました。

何がそうであったかと言えば、まず、秋山庄太郎がかなり「筆まめ」だったこと。旅の先々から、一人娘の紀子(当時10歳)宛に出した「絵はがき」の数々。小学生向けの文面ですが、行間からは、不惑の齢を迎えた写真家の悲喜こももごうかがえます。

もうひとつ、それが今日まで保存されていたことについては、伊都子夫人の想いのこもったものをたいせつにする人柄ということに尽きるでしょう。

秋山庄太郎の遺品は、幼少期の写真やアルバム、成績表、戦地からの手紙等々、かなり多岐に及びます。関東大震災では母親のまさか、家が焼け落ちる前に品々を持ち出していたようです

し、第二次大戦中、秋山家が空襲の被害を受けなかったことが、多くの資料を残す要因になったといえるでしょう。

しかし、大きな理由は、秋山庄太郎自身、「捨てる気にならなかった」というよりも、多忙に過ぎて「捨てる余裕がなかった」と言えるでしょう。晩年、「コンピュータで作品を整理しては」という周囲のすすめにも、首をタテにふることはありませんでした。「フィルムを見ながら、ああでもない、こうでもないと考えたり、あっちこっち動かしたりしていると、いろいろな考えが浮かんでくる。もう、整理する余裕はないから、死んだ後、よろしく頼むよ」と、家族に語っていました。

スーパースターを写した貴重なガラス乾板も

当館の収蔵庫には、数えるだけでも何年かかるかわからないほどのフィルムがあり、ほとんど劣化が見られないガラス乾板フィルムもかなりの量にのびります。これらのなかには、チャンピオンベルト姿が猛々しい力道山のブロマイド、忽然と映画界から去った美人女優原節子のポートレートが、それぞれ数点見つかっています。歴史的に

も貴重な写真がこれからも見出されることと思います。

遺作や遺品の整理を進めていると、あたかも探していたジグソーパズルのピースを見つけたような場面に遭遇することがしばしばあります。

フィルムや原稿、美術品のほか、生前に多くの方々からいただいた思い出の写真、手紙、写真集、記念の品等々。さまざまなものが、私どものまわりをうず高く取り囲んでいます。それらをただ眺めているだけでは、私たちに何かを語ってくれることはありません。しかし、ふとしたことで、それらに明かりが照射され、何かを語りはじめてくれることがあるのです。

私の仕事部屋に、花のある庭園を描いた、額装した大きなジグソーパズルが掛かっています。何年前か、家族が夜な夜なやって完成したものです。ときどきこれをぼんやり眺めては、一つひとつの資料が組み合わさって、どんな秋山庄太郎の世界ができるだろうか、と思うことがあります。

今日まで「捨てられる」ことのなかった資料は、いわば幸運な「宝もの」。これからも、展示企画に則して、写真家の知られざる素顔や足跡等もご紹介できれば、と考えています。

●バラの撮影地ご紹介

「かのやばら園」(鹿児島県鹿屋市)

秋山庄太郎が撮影と審査に訪れた
日本一をめざす南国の「ばら園」

山並を背景にした広大な園内

この9月からの「薔薇」展にちなんで、秋山庄太郎にゆかりの深い「かのやばら園」をご紹介します。同園は鹿児島県鹿屋市の霧島ヶ丘公園に隣接して、面積8ヘクタール、4千種類5万株という、名実ともに日本一を誇るバラ園です(2006年4月現在)。

豊かな丘陵地帯に作られた園内には世界中から収集されたバラを国別で楽しめる「世界のばら園」や、貴族や王族の名前が付けられたバラが集められた「ロイヤルガーデン」などさまざまな工夫が凝らされ、美しいバラをカメラに収めたいという人にとっても、一度は訪れたい場所です。

秋山も2001年に同園主催のバラのフォトコンテスト審査のために初めてこのバラ園を訪れ、以後たびたび審査や撮影に来園しています。現在は浅井慎平氏の審査による『かのや「ばら」と「海」のフォトコンテスト』として継続されていますので、ここ「かのやばら園」で心に響く素敵な写真を撮って、応募されてみてはいかがでしょうか。

学芸員室から

花の写真をライフワークとした秋山庄太郎が、特に愛したのが「薔薇」でした。残されたフィルムは、現在、整理中のもので、本人が明らかにセレクトしたと看做されるものだけでも、およそ5000点ほどにのぼります。いったいどれだけの回数、この花の前でシャッターを切ったことでしょうか。

ところで、こうした薔薇の作品は、様々なモノにも活かされていました。下敷きのような定番ものはもちろん、ファ



2002年10月撮影



2001年5月撮影会にて

「かのやばら園」

■所在地＝鹿児島県鹿屋市浜田町1250番地／
電話0994-40-2170

<http://www.baranomachi.jp/open.html>

ミレスのメニュー表、毛布にタオル、ハンカチ、和服、扇子、タバコ、新聞の回収袋、時計や魔法瓶といった実用品にいたるまで、「まさか」というものがあって驚きます。

秋山は、こうして自分の作品が日常生活のなかに取り入れられるのを大いによりこんだそうです。私たちはこれらを「秋庄グッズ」と仮称していますが、今回の「薔薇」展では、その一部を展示室でご紹介します。

(学芸員・斎藤智志)

TOPICS

庄太郎が愛したバラを
育て上げた人々

浜田バラ園(神奈川県平塚市)
浜田光男さん 義雄さん



左から浜田光男さん、息子の光揮さん、弟の義雄さん

栽培の苦勞と成果を秋山先生が
レンズを通して理解してくれた！

1997年5月に集英社から発刊された秋山庄太郎の写真集『薔薇よ！Rose365』は、薔薇だけでまとめられた写真集としてその代表的な一冊といってよいでしょう。そのページの多くを飾った美しいバラの生産者が、平塚市にある「浜田バラ園」を経営する浜田光男さんと義雄さんのご兄弟です。

出会いは1995年11月頃、12年ほど前のことになります。たまたま平塚美容組合の要請で講演に訪れた秋山から「バラの撮影がしたい」と希望があり、それを聞いた知人が「それなら浜田バラ園しかない」と、紹介したのがきっかけでした。

それを機に浜田さんのバラに惚れこみ、毎年春と秋に撮影に訪れた秋山を迎える、光男さんと義雄さん。同じ花を愛する者同士、通じ合うものは多かったようです。「お客様が心から喜んでくれるバラとは？」と自問自答しながら熱心に栽培技術の向上に努め、品評会でも数え切れないほどの金賞や農林大臣賞などを受賞してきた光男さんでしたが、「その努力と成果をレンズを通して秋山先生に

理解してもらえたことが、花作りにたずさわる者としてとても嬉しく励みになった」といいます。

その後、赤坂プリンスホテルで行なわれた「薔薇よ！」の出版記念パーティーで、本を見てびっくりした光男さん。「後ろのほうにちょこっと載っているのかなと思ったら、なんと表紙とトップの何ページもが、うちのバラじゃないですか」。数々のバラを見てきた写真家の眼は、やはり「本物」の美しさを鋭く見抜いていたのでしょう。

土壌や環境にこだわり、「いい土で栽培されたバラこそが本当に美しく、力強く、感動を呼ぶバラになると思う」という信念を持つ浜田さん兄弟。その日本のバラをより美しく捉えた秋山の作品と、当写真美術館の9月の「薔薇」展で再び出会うことができます。



写真集『薔薇よ！』の表紙

Information

秋山庄太郎とコラボレートしたピアニスト
中村由利子『微笑みの軌跡』

The Place to Return

(定価2,800円 アミューズソフトエンタテインメント)



中村由利子『微笑みの軌跡』

秋山庄太郎は生前、100点近い著作を上梓しており、本館第2展示室の略歴パネルには年代順にそれが紹介されています。作品集がいちばん多く刊行されたのが1990年とその前後。「若いときにはあまり出していない。撮るのが忙しかったからね。溜め込んでいた、と言えるかもしれないけれど、作品集の刊行については遅咲きのほうかもしれない」。生前に自らそう語っていました。

1990年の数多くの著作リストのなかに、1点、CBSソニー刊行によるビデオ作品が含まれています。タイトルは『花舞台』。ハイビジョン・カメラで収録された15分ほどのVHSテープには、秋山の撮った薔薇や蓮などの鮮やかな花作品が次々と登場します。このビデオ作品で音楽を担当したのが、ピアニストであり作曲家でもある中村由利子さんで、アルバム『絹の薔薇』(CBSソニー)収録の代表作『誓い』など4曲が効果的にコラボレートされています。

中村さんは横浜生まれ。お父さんが画家だったこともあって子供のころから絵画に親しむ一方、雨音や絵本などからインスピレーションを受けて作曲を始め、13歳で横浜市主催の作曲コンクールで入賞。フェリス女子短期大学音楽科卒業後、多彩な音楽活動を展開し、1987年にCDアルバム『風

の鏡』(CBSソニー)でデビュー。以後、数多くのCDを今日まで発表し続け、USENのイーजीリスニングやBGMのチャンネルでは中村さんの作曲・演奏による楽曲は1日に数え切れないほど流れています。

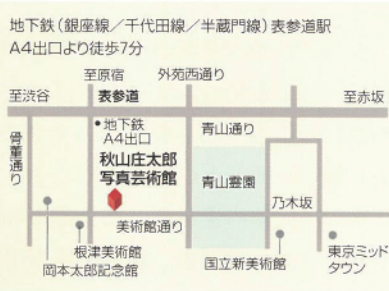
その中村さんは今年、デビュー20周年。それを記念して、7月には『微笑みの軌跡』と題するCDアルバムを発表。「自分の音楽人生を一言で表す微笑みという言葉」「現在までの自らの芸術を見つめなおす」というセンテンスをテーマにしたもの。

「秋山先生の作品一つひとつの中に、優しいまなざしや深い愛情、時に芸術家としての素敵な遊び心も感じられ、いまでも拝見するたびに心動かされます」と語る秋山ファンの中村さんだけに、このアルバムジャケットの撮影にも本館第3展示室が使われました。ここには秋山とのコラボレート作品の作曲にも使われた中村さんの思い出のピアノが、ご本人からの寄贈により展示されています。

こころの「休み時間」。



写真美術館
Shotaro Akiyama Photo Art Museum



107-0062東京都港区南青山 4-18-9
tel: 03-3405-8578 fax: 03-3403-8865

「花信—はなだより」Vol.2

2007年9月12日発行

題字●秋山庄太郎

発行●秋山庄太郎写真美術館

発行人●上野紀子

編集人●板見浩史

アートディレクター●小林健三

レイアウト●有限会社ニコリデザイン

編集●有限会社ジョフィー・コミュニケーションズ

印刷所●有限会社グッド・スタッフ

<http://akiyama-shotaro.com>